

「ハーモニー」100号に寄せて

ハーモニーが記念すべき第100号を迎えることができましたことに、関係者の一員として心からお祝い申し上げます。長年の愛読者の皆様、ならびに編集などで関わられた歴代の関係者の皆様、本当にごころさまでした。

25年前、ひとはく開館期に、広報に関しては素人の研究者が集まって、五里霧中の中、博物館の情報誌を発行しようと、タイトル、デザイン、ロゴ、編集方針をどのようにするのか、大いに議論していたことを思い出しています。その頃に議論した館員は、他大学などへ転出したり、定年したりして少なくなりました。しかし、ハーモニーそのものは、社会にしっかりと根付いています。これも時の流れというものでしょうか。

発刊以降、館の予算削減やホームページとの棲み分けなどの理由で、ハーモニーのページ数は徐々に少なくなりました。しかし、編集担当者の努力などで、掲載する内容は速報性を要する記事から、読者が必要とする情報をしっかりと伝える方向に変化してきたと思います。これからも、紙に印刷された意味での数少な

散歩を楽しもう

急激に高齢社会になった。男の寿命は平均81歳、女は87歳。人類史上初めての出来事です。ふつう停年は60～65歳ですから、死ぬまでに20年余。その間どうして暮すか、大きな問題です。

カメラ、盆栽、俳句(会)など、趣味をなにか持っている人はいいですが、案外何も特定の趣味を持たない人が多いものです。そんな人に私がすすめるのは、自然が好きになることです。健康のために散歩がすすめられます。そのためには、背筋を真っ直ぐにのびし、大きく手をふって歩幅75cmで歩くなどのマニュアルがあります。肉体の健康には効果的でしょうが、それ

これからの「ハーモニー」

25周年で100号を祝う「ハーモニー」は、ここまですべて順調な歩みを刻んで、ひとはくの歴史を記録してきました。「ハーモニー」の展開が、ひとはくの発展そのものだったといえそうです。

周年の記録は、しかし、過去の成果を振り返ることによって自己陶醉に陥る危険を冒すことがしばしばです。正しい歴史の認識は未来に生かされてこそ意味をもちます。歴史が未来を拘束するのではなく、歴史の学びに基づいて未来を発展させることが肝要です。

博物館の活動が社会的にも期待され、見直されていますし、多様な活動に取り組む博物館の積極的な活動も見えています。それは、一時代前の日本では考えら

館長 中瀬 勲

いひとはくの広報媒体として、内容をさらに変身させながら継続できることを期待します。

ハーモニーの100号のことを考えている際に、何故、私達の博物館が、「人と自然」という名称になったかを、懐かしく思い出していました。記憶されている方も少ないと思いますので、ここに記述しておきます。当時、千葉、徳島、滋賀などで、自然系の博物館が先行して設立されていました。これらの名称も参考にしながら、当初は、まじめで一般的な、「自然系」や「自然環境」といった候補がありました。共に「人と自然」の候補も提案されていました。準備室で侃侃諤諤の議論をしましたが、最終的には、これらの中から設置者である知事が、「人と自然」に決定されたのでした。以降、兵庫県では、施設の名称で、「人と〇〇」が一般化したようです。ひとはくが、このような名称の魁としての役割を果たしたのでしょうか？



ハーモニー 76号
「副館長が見た『ひとはく20年の歩み後編』」より

名誉館長 河合 雅雄

に加えて精神の健康を高める方法をつけ加えたい。それは周りの景観を楽しむことです。

日本には四季があり、四季のめぐりに従って自然は様々な姿を見せてくれます。道端の雑草でも四季による変化を見るとけっこう面白い。その際雑草の名を知ると、親近感がわくし楽しさは倍加する。だが、名を調べるのは少々面倒です。そんなとき、遠慮なく「ひとはく」へどうぞ。



ハーモニー 48号
「表紙」より

名誉館長 岩槻 邦男

れなかった状況です。ひとはくはその先頭を切った活動をしてきたと誇ることができるでしょう。しかし、その成果にあぐらをかくのではなく、今日の博物館はいかにあり、明日の博物館にどう繋げていくべきか、課題は山積しています。社会から期待されるのとは逆に、博物館の管理運営には逆風も吹いています。そういう時にこそ、これぞ博物館の活動と言える歴史の構築に励まなければなりません。101号からの「ハーモニー」でその展開が読み取れるようでありたいものです。



ハーモニー 42号
「科学するよこび」より

コラム エチオピアの大地にデザインされた最古の石器を探る

エチオピア南西部にあるコンソ遺跡は、約200万～70万年前の地層が露出し、ホモ・エレクトスやボイセイ猿人といった古人類の化石や、彼らが製作した多数の石器を産出することで有名です。1991年秋にエチオピアのブルハニ・アスファオ博士らの調査団がこの遺跡を発見し、そこに参加した諏訪元博士(現東京大学総合博物館館長・教授)を代表とする研究グループが1993年から本格的な調査を始めました。筆者は1994年夏に初めてコンソ遺跡を訪れ、今にいたるまで化石や石器の年代を明らかにする研究を続けてきました。

コンソ遺跡は、約150万年前の世界最古級のアシュール型石器の産地として科学の世界に登場しました。アシュール型石器は、それまでの旧石器型石器とは異なり、初めて用途を考えて形状が整えられた打製石器であり、初期人類の知能を探る上で貴重な資料です。この石器の正確な時代を決めるために十年近い年月を費やしましたが、その間には思わぬ発見があいつぎました。

1つ目は、より古い約175万年前の最初期のアシュール型石器の発見です。地質調査の際に石器があることに気づき、後に調査隊全員で歩き回った結果が大発見につながりました。2つ目は、ずっと新しい約85万年前の後期アシュール型石器の発見です。楕円の平面形と放物線状の断面形を示し、刃先が細かく加工されたハンドアックス(手斧)は、現代の工芸品と比べても遜色ない美しさを感じさせます。こちらの石器も、地質調査を兼ねたコンソ遺跡の巡検で発見しました。

コンソ遺跡全体をくまなく、深く調査するという諏訪先生の方針が2013年に身を結び、約175万年前、160万年前、150万～140万年前、125万年前、85万年前のアシュール型石器の変遷がていねいにまとめられ、アメリカの国際誌に報告されました。

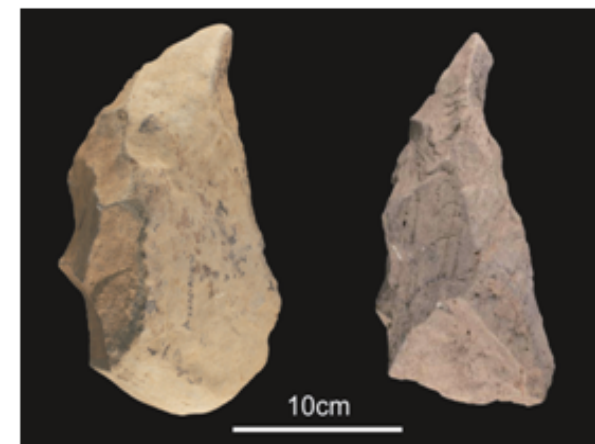
その変遷を見てみると、ハンドアックスは時代とともに洗練された大きさや形体に変わっています。これに対して、ピックという先のとがった石器では先端部が小さく曲がる特徴がずっと引き継がれ、全体の形状も大きくは変わっていません。ピックは穴掘りや、木の枝を切り落としたり動物の骨を割ったりすることに用いられたようです。先曲がりの形状は、これらの用途にぴったりだったのでしょう。

このように約175万年前に誕生したアシュール型石器は、用途を考えてデザインされた最古の道具と言えます。現代のものづくりに通じる石器技術の変遷をコンソ遺跡でたどると、大きな技術改革が気候などの外部環境の激変と歩調を合わせて起こったこともわかります。「必要は発明の母」と言いますが、太古の人々にとっても生き抜くための必要性が大切だったのかもしれない。

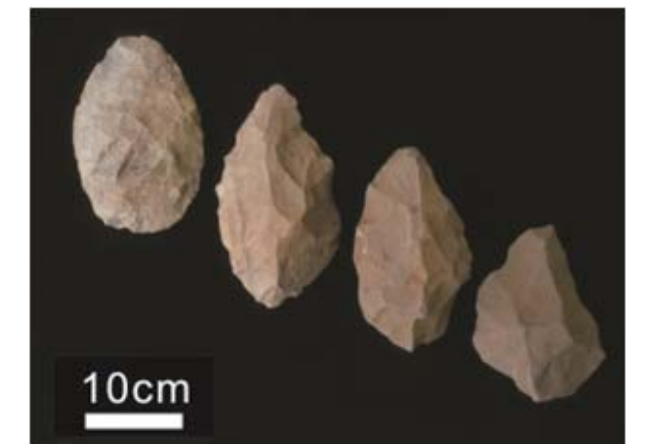
加藤 茂弘(自然・環境評価研究部)



約175万年前の石器サイトの発掘調査



約175万年前のアシュール型石器
ピックの2例(写真提供 諏訪 元)



コンソ遺跡から出土したアシュール型石器の
時代変遷
右下から左上へ約175万、160万、140万、85万
年前のハンドアックス(写真提供 諏訪 元)